



おやさま 逸話篇に教祖の ひながたを学ぼう

5月大教会教会長会議
立教188年5月22日
大教会長 片山幹太



発行所 〒763-0223 香川県丸亀市本島町泊268
天理教本島大教会
電話 0877-27-3321 (代)
本島通信編集室 R250523-0529-16
奈良県天理市指柳町270-1
本島詰所 〒632-0093
電話 0743-63-1571 (呼)
<https://www.honjima.com>
Email: webmaster@honjima.com
大教会 朝夕おつとめ時間
【6月1日～8月31日】
朝づとめ 午前6時00分
夕づとめ 午後7時00分

今月(5月)はいよいよ斯道会別席団参があります。お連れする方々に喜ばれ、「おちばつてありがたいな」「あたたかいところだな」と感じてもらえるように、引率する私たちは心温かく勤めさせていただきましよう。さて、教祖140年祭まであと8ヶ月というところまでできました。論達の中で、

「教祖年祭への三年千日は、ひながたを目標に教えを実践し、たすけ一条の歩みを活発に推し進めるときである。」

とあります。
ひながたとは、教祖がみずからお通り下さった私たちの手本です。それは稿本天理教教祖伝逸話篇にたくさん記されています。一例を引用させていただきます。

七 真心の御供
中山家が、谷底を通っておられた頃のこと。ある年の暮れに、一人の信者が立派な重箱に綺麗な小餅を入れて、「これを教祖にお上げして下さい。」と言って持って来たので、こかんは、早速それを教祖のお目にかけてみると、教祖は、いつになく、

「ああ、そうかえ。」

と、仰せられただけで、一向御満足の様子にはなかった。

それから二、三日して、又、一人の信者がやって来た。そして、粗末な風呂敷包みを出して、「これを、教祖にお上げして頂きとうございませ。」と言って渡した。中には、竹の皮にほんの少しばかりの餡餅が入っていた。

例によって、こかんが教祖のお目にかけてみると、教祖は、

「直ぐに、親神様にお供えして下さい。」

と、非常に御満足の体であらせられた。

斯道会別席団参報告
日にち：5月25日

婦参総数	853名
初席者	29名
中席者	51名
おさづけの理拝戴	1名
前夜祭参加者	265名
記念講演参加者	459名

※団参事務局扱い分

で、「これも、親神様のお蔭だ。何は措いてもお初を。」というので、その掲き立てのところを取って、持って来たのであった。

教祖には、二人の人の心が、それぞれちゃんとお分かりになっていたのである。

こういう例は沢山あって、その後、多くの信者の人々が時々珍しいものを、教祖に召し上がって頂きたい、と言うて持って詣るようになったが、教祖は、その品物よりも、その人の真心をお喜び下さるのが常であった。

一六〇 柿選び

ちようど、その時は、秋の柿の出盛りの旬であった。柿井おさめは、教祖の御前に出さして頂いていた。柿が盆に載って御前に出していた。

教祖が、その盆に載せてある柿をお取りになるのに、あちらから、又こちらから、いろいろに眺めておられる。その様子を見て、おさめは、「教祖も、柿をお取りになるのに、矢張りお運びになるのやなあ。」と思っ

ていた。ところが、お取りになったその柿は、一番悪いと思われる柿をお取りになったのである。そして、後の残りの柿を載せた盆を、おさめの方へ押しやって、

「さあ、おまはんも一つお上がり。」と、仰せになって、柿を下された。この教祖の御様子を見て、おさめは、「ほんに成る程。教祖もお運びになるが、教祖のお運びになるのは、我々人間どもの選ぶのとは違って、一番悪いのをお取りになる。これが教祖の親心や。子供にはうまそうなのを後に残して、これを食べさせてやりたい、という、これが本当に教祖の親心や。」と感じ入った。そして、感じ入りながら、教祖の仰せのままに、柿を頂戴したのであった。教祖も、柿をお上がりになった。

次に「たすけ一条の歩みを活発に」との論達のお言葉について、「たすけ一条」の対象は事情や身上で悩んで

いる方へのおたすけがあります。また一つには、次代を担う子どもたちに教えを伝えること、親から子へ、子から孫へと、次の世代に道が消えないように、むしろ道がさらに太くなっていくように心を尽くすことも、大切な「たすけ一条」の歩みと言えらると思えます。

本日、「縦の伝道講習会」における島村正規先生のお話の中で、私が特に感じたポイントは、「分かるうが分かるまいが、それぞれの家の元一日を伝える」こと。「言い難いことでも、いんねんの自覚を伝える」こと。「ご存命の教祖のお話をすること」「15才になったら、心遣いは自分の責任であることを話す」こと、などです。

「まだ分からんからええ」ではなく、少年会員のうちから、後々の芽生えのために、あきらめず伝えていく努力を今日あらためて心に誓いました。

年祭活動、三年千日を仕切って最後の一日まで心明るくたすけ合、一手一つに努めさせていただきます。

(文責・本島通信編集室)

「子供に教祖の話をしよう」 おやさま

少年会本部副委員長 島村正規先生
しまむらまさのり

ただ今は、全教が一手一つになって、教祖140年祭に向かって成人の足取りを進めさせていただいている時句であります。その中、年祭活動の指針である論達第四号には、

「教祖お一人から始まったこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命に通り、私たちへとつないで下さった。その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである。」

とお示しいただきます。末代へとこの道を繋げていく意識を持ってこの年祭活動を勤めることが大切であると、真柱様よりお仕込みいただいているように思います。親から子、子から孫へと信仰を伝えていくというのは、まさに縦の伝道でありましょ

う。そして、代が重なっていく上において、まずは家の信仰の元一日を振り返り、思い出すことが大切であると思えます。

そこです、みずから振り返る意味を込めまして、私の家の信仰の元一日、そしていんねんについて、お話しさせていただきますと思います。

私は信仰5代目になります。初代島村菊太郎がこの道に入ったのは、明治21年のことでした。初代は高知県出身ですが、当時、大阪で商売しており、痔を患って、大変苦しんでいました。記録には血膿が流れたとありますので、単なる痔ではなく、痔ろうであったらうと言われていると思います。

そうして苦しんでいるところに、同郷の人からお道のお話を聞きま



す。「この神様は、この世界、人間一切をお造りくださった元の神様である。そして、人間の身体をお貸しくださった上に、毎日ご守護くださる真実の神様である」というお話を聞き、初代は、「人間を造って以来今日まで、またこれからも未来永劫にご守護くださる神様なら、どんな病気でたすけてくださるに違いない。この神様にたすけてもらえないようなら、他にたすかる道はないはずだ。よし、命懸けでおすがりしよう」と心に誓い、手にしていた薬瓶を川に投げ入れました。そしてその後、三度のおちばがえりを経て、痔ろうをすつきりおたすけいただきました。しかし、親神様のお手引きは続きます。

商売を続けるうちに、今度は肋膜

という病気にかかりました。肋膜とは、肺の外部を覆う胸膜に炎症が起る疾患です。肋膜はそれ自体で発症することは少なく、ほとんどは癌・結核・肺炎などの後に発症することが多いということです。この時、初代は血の痰を吐いたということですので、肺結核だったのではないかと推測されています。痔ろうについても結核性のものがあるということですので、その可能性は高いと思われます。肺結核となれば、当時は死にいたる病です。それほど深刻な状態だったか、想像できます。

症状は、初めに右の胸が痛み出し、時々高熱を出していましたが、次第に病状は悪化し、痰に血が混じるほどになり、ついには立ち上がれないほどの重態になりました。

その時、ある布教師の方がおたすけに来てくださり、病気に込められた神意について、お諭しをしてくださいました。その内容は、「右の肋膜が痛むというところから思案すると、母親や妻、あるいは目下の者の心を痛めているということではないかと思われませんが」ということでした。

実は、肋膜の身上になる少し前、初代は高知で結婚をしました。しか

し、「今大阪へ連れていっても、二人で暮らす家がない。ひと月もすれば連れに戻るから、しばらくここで待っていてくれ」と言って、大阪に一人出てきて、妻をほったらかしにしていたんです。こうしたことに思い至り、親神様に深くお詫びをして、妻と両親にお詫びの手紙を出しました。

そうするとだんだんと身体の状態も良くなっていきました。そして、身体を良くしていただいたご恩報じの気持ちから、「千人の人をたすけておちばへお連れしよう」と決心し、高知に戻り、にいがけ・おたすけに邁進するようになりました。肋膜もすつかりと御守護いただきました。これが、私の家の信仰の元一日です。この5代前のおじいさんが神様におたすけいただき、ご恩報じのにいがけ・おたすけに勤めていなければ、いまの私にはいません。そう考えてみれば、この自分の存在の元を決して忘れてはいけないと思います。

私には、その家の信仰の元一日とのいんねんを感じさせられる経験があります。私が生まれた時の話ですが、私の誕生月は2月で、寒い時に生まれたわけですが、生後2週間目

に風邪をこじらせ、肺炎を起こしてしまったそうです。保育器に入れられて、足の裏から管を通され、ひよつとすると命さえも危ないという状況でした。そこを両親の心定め、皆様方のお願いによって神様よりおたすけいただいております。先程申しましたように、初代は肺結核の身上のお手引きをいただいて、この人だけの道を通ろうという心定めをしております。私の場合は肺炎ですので、死に病の肺結核に較べれば軽い症状かとは思いますが、ちゃんと肺に印をみせていただいております。このことを小さい頃から何かの時には親が話してくれました。「お前はなあ、赤ん坊の時に肺に身上を見せていたから、元一日にいんねんがあるんやで」というんですね。

お道では、
「さあ小人々々は十五才までは親の心通りの守護と聞かし、十五才以上は皆めんくの心通りや。」

(おさしつ明治21年8月30日)

と教えていただきますが、わが家では子供の誰かが15歳の誕生日を迎えますと、その朝に父からご先祖様の写真がある部屋に呼ばれるんです。そして、父から「今日からお前はな」

と、15歳を迎えた意味について話を聞かせてもらいます。

私には姉が2人おりますが、姉の時はそのように直接話をしています。私が15歳のときはちょうど父は御用で出ておりまして、家にはおりませんでした。私は、「また帰ってきてから話されるのかなあ」と思っておりまして、ちゃんと手紙を書いておいてくれていました。そして母から15歳の誕生日にその手紙を渡されました。手紙には15歳を迎える意味と、先程申しあげた赤ん坊の時の話などが書いてありました。これから通らせていただく上でそのことを忘れてはいけないということですね。

そのように、両親がしてくれたおかげで、私は大人になるにしたがつてこの道の信仰、そしていんねん、ということ、自然と意識するようになったように思います。それも、両親がごこという時に話をしてくれたからです。小さい頃は、よくわかりません。それでも小さい頃からこの道の教えを伝えておくということが、縦の伝道の上にはとても大切だと感じるのです。

私のいんねんの自覚をもう一つお

話いたします。私の家には、一代おきに子供が生まれず、養子を迎えるということが続いています。先程お話ししました初代は子供が生まれず、2代は養子で鳥村家に入りました。そして3代の祖父が生まれます。そして4代の父が養子に入りました。そして、信仰5代目の私が生まれています。

つまり順番でいいますと、私は子供が生まれない順番になります。「順番で考えるなんてそんなアホな」と思われるかもしれませんが、私としては、心に常にあり、いんねんとしてずっと捉えてきた事柄なんです。

現在は多様性が重視される時代です。子供を生まないという選択をされる方も多くいらっしゃり、それは尊重されるべきです。また子供を望んでもなかなか難しい方もいらっしゃるし、現に私も父が養子に連れてくれたからこそ生まれたわけですので、そう思いますとご守護の形とこの話は、鳥村家に代々そのような事が続いている、それが私のいんねんの自覚であったという意味においてお聞きいただき、ご理解いただけたらと思います。

私は妻と結婚をしましたが、結婚したら、そんないんねんは本当はなくて、子供をすぐお与えいただけかもしれないとも思っていました。しかし、やはりそんなに甘くはありませんでした。1年経っても2年経ってもお与えいただけません。3年、4年、5年、6年と年数が経っていきます。やっぱり今生もお与えいただけなのかもしれないと思いましたが、そうした日々を過ごしていましたが、7年前に男の子をお与えいただきました。結婚して8年目のことでした。そうした歳月を経て、一つの御守護を頂戴いたしました。

現在の姿をいただいていることとは、やはり代々信仰を重ねていくことの大切さ、ありがたさであります。教祖は、

「一代より二代、二代より三代と理が深くなるね。理が深くなると、末代の理になるのや。人々の心の理によって、一代の者もある、二代三代の者もある。又、末代の者もある。理が続いて、悪いんねんの者でも白いんねんになるね。」

(稿本天理教祖伝逸話篇九〇「一代より二代」と仰せになりました。代が重なって

こそ、良いいんねんに変わってくると言われています。私は、教祖のお言葉がしみじみと胸にしみるのです。初代から4代までお道を一生懸命に通ってきてくれ、少しずついんねんを果たしてくれたからこそ、今日の結構があるのだとつくづく思います。

「子供が信仰するかどうかは、子供に任せたらいい。子供自身が考えたらいい」という考え方がありますが、それでは本当の結構はお見せいただけないのではないかと感じます。もちろん、道が続いていくことは、簡単ではありませんが、まずは親が何としても子供に信仰を受け継いでもらいたいというあきらめない心、強い信念を持つことが大切ではないでしょうか。

そして、もう一つ子供のご守護を頂戴したことで思いますのは、おちばにしっかりと繋がらせていただくということですね。

私は、青年会本部の御用を何年か勤めさせていただきましたが、最初の頃、一緒に勤めた先輩から、「おちばで御用をしっかりと勤めさせていたならば、子供をお与えいただけるよ」ということをたびたび聞き

ました。実際におぢばの御用を勤め終わった3ヶ月後に妻の妊娠がわかったのです。本当にありがたいことでした。

教祖は、

「ぢば、一つに心を寄せよ。ぢば、一つに心を寄せれば、四方へ根が張る。四方へ根が張れば、一方流れても三方残る。二方流れても二方残る。太い芽が出るで。」(稿本天理

教祖伝逸話篇一八七「ぢば一つに」)

と仰せくださいました。ぢば一つに心を寄せることによって根がしっかりと張り、どんな節が来ても倒れることなく持ちこたえ、後々には太い芽、大きい御守護がいただけるとううありがたいお言葉です。

直接的におぢばには難しくても、所属の教会、もしくは近くの教会においておぢばへ心を寄せながら、さまざまな信仰実践に勤めることも、おぢばに繋がることになるのではないかと思います。

おぢばを目標に、おぢばに心を繋いで種を蒔かせていただくことが、縦の伝道の上においても、とても大切ではないかと思うのであります。

ここまで、私の家の信仰の元一日について話してきましたが、それを

台に縦の伝道の上において大切だと思えますことは、家の信仰の元一日、いんねんなど、お道の教えを、子供にわかってもらわなくても、ていねいにしっかりと伝えるということ、そして、親が代々信仰を重ねていくというあきらめない強い信念を持つということ、そして、ぢば、一つに心を寄せるということであります。

さて、そのように私自身子供を

わりましたが、私も子供に喜んでこの道を通ってもらえるようになってもらいたいと念願しております。さきほどは島村家のいんねんについてお話ししましたが、一番大切ないんねんは、陽気ぐらしの元のいんねんが私たちにはあるということだと思えます。その陽気ぐらしに向かって、私たちは現在、教祖の年祭活動を勤めさせていただいています。その年祭活動をどう通らせていただくかというところが、縦の伝道の上においても、今一番重要なことだと思えます。

1月の少年会年頭幹部会において、本年の少年会の活動方針が発表されました。それが、「教祖のひながたを目標に教えを実践し 子供に信仰のありがたさを伝えよう」です。こ

れは年祭活動中3年続けて同じ活動方針ということになりますが、少年会活動に携わるお互いとしても、今回の年祭活動の眼目であります、教祖のひながたを目標に教えを実践することに励み、それを通して感じた信仰のありがたさを子供たちにしっかりと伝えていきたいということです。この年祭活動に勇んで勤めさせていただくことが、縦の伝道の大きな台になると信じております。

「教祖のひながたを目標に教えを実践する」という事柄につきましては、論達にもひのきしん、にをいがけ、おつとめ、おさづけなど、種々かどめをお示しいただいています。それぞれ教会に繋がる私たちが互いにとりましては、より具体的には、大教会が定めた方針、皆さま方は本島大教会の活動方針に沿って実践するということになるかと思えます。教会の方針に沿ってしっかりと動き、その中に信仰のありがたさを感じられるように努めたいものであります。

真柱様は、本年の年頭幹部会において、「教祖のひながたは、すべて、どうとでも教えの道を通すく

につながないければならないという、教祖の固いご信念とも言える親心の現れと拝察させていただいております。

私たちは、こうしたひながたの中から、道をつなぐために心を尽くしきられた教祖のお心を学び取り、自分の持ち場立場のうえに反映して、現在に生かしていく心づくりにとどこまでも励むことが肝要であります。」

とお言葉を下さいました。年祭活動最後の年である本年、私たちお互いに、教祖の「どうとでも教えの道を通すくにつながないければならない」とのご信念を我が心とさせていただいで、教祖のひながたを持ち場立場の上に反映し、子供たちに信仰のありがたさや喜びをしっかりと伝えていけるよう、少年会活動に勤め励ませていただきたいと存じます。

そして、年祭活動という点でさらに申しますならば、ぜひ子供と一緒に、教えの実践をしていきたいものです。このたびの年祭活動にあたっては、お互いにいろいろと心定めをさせていただいていることかと思えます。年祭活動が始まる前に、私たち夫婦で心定めを話し合っていた時

に、妻は「この年祭活動は、息子と一緒ににをい、がけに出させていたただこうと思っけています」と話してくれました。いま、時間を見つけて勤めてくれていきます。

また、年祭活動に入りまして、うちの大教会のある内勤者が、子供を連れて夕づとめ後に神名流しをするようになりまして。その家の子供とうちの息子が同い歳で仲良しでして、どうやらその子が神名流しの時に拍子木を叩いているようなんです。息子はそれがうらやましかつたようで、息子が「拍子木叩きたい。神名流ししたい」と言い出しまして、初めて私と息子の二人で、私が天理王命の旗を持って息子が拍子木を叩いて、神名流しをさせていただきました。子供同士のうらやましが動機ではあります、子供の方から言い出して親子で神名流しをさせていただけですが、私にとってはとても嬉しく、ありがたいことでした。年祭活動の実践というものは、機運となって人に広がっていくもので、子供にも影響があるのだと思います。

供にも教えをしっかりと伝えられる時句といえるのではないのでしょうか。共々に、ひながたを目標に教えを實踐し、子供に信仰のありがたさを、力を入れて、拍車をかけて伝えさせていたきたいと思えます。

次に、少年会の活動方針には重点項目というものがありますが、その中に「子供に教祖のお話をしよう」という項目があります。子供にこの道の教えを常日頃から伝えることは非常に大切なことですが、例えば少年会の行事などで教えを話す時には、親神様の御守護やひのきしんなどについて話すことが多く、案外教祖の話をする機会は少ないように思うのです。

子供が将来立派なようば、くに育つためには、子供自身が教祖のひながたを心に治めることが欠かせません。そのためにも、日常生活や少年会活動の場において、子供に教祖のお話を頻繁に説き聞かせるよう努めていきたいということ、子供に教祖のお話をしよう」という重点項目を定めさせていただきました。

「子供に教祖のお話をしよう」と掲げられてから、改めて息子に「教祖って知ってる?」と聞いてみたくです。私は、「中山みき様やろ」とか

「神様を教えてください人やろ」と言うかなと思っけていたんですが、息子は「神様のところの、こっち側のやつやろ」と言いました。私は「あ、ああ。そうやな」としか言えませんでした。

教会でよく「親神様に拝礼、教祖に拝礼」と言っけて参拝しますので、それが一番に耳に残っけていたのだと思えます。ですから、彼にとっけては、それ以外はなかつたのです。私は息子のこの答えを聞いて、「教祖のことを全然話してなかつたな」と改めて反省しました。ですが、まだ小さいので、あまり難しいことはわかりません。そこで、教祖について触れられてる昔の絵本を読むところから始めようと思っけて、読んだりしてきます。

教祖のお話をすることを通っけて感じたのが、子供に教祖のお話をしようとする、私自身が教祖のことをたくさん考えることができるなあと、たくさん考えることができるなあと、私たちが育成会員がこの年祭活動において、教祖のひながたをより身近に感じさせていただくことに繋がると感じています。

家庭において、また少年会の行事において、教祖のお話をすることを

心掛けて、親も子も教祖を心においてこの年祭活動を通らせていただきたいと存じます。

では、最後に今年の「こどもおちばがえり」についてお話いたします。

今年のこともおちばがえりは、7月27日から8月3日までの8日間で開催させていただけます。そして、年祭活動3年目、最後の年にあたり、本部からおちばがえりの推進が言われており、昨年以上に賑やかなことでもおちばがえりにさせていたいただきたいという思いから、今年は、「年祭活動最後の年、一人でも多くの子供とともにおちばがえりの喜びを味わおう」ということと「全教会からの婦参を目指そう」ということをお願いさせていただきます。

こどもおちばがえりの意義は、「子供におちばがえりの喜びを味わってもらい、この道の信仰の喜びを感じてもらおう」ということです。それは、子供が将来この道に繋がりに、立派なようば、くになるための大きな台になるに違いありません。そのためにも、一人でも多くの子供にぜひこの夏おちばに帰っけてきてもらいたいと思っけています。

そして、全教会からの帰参を目指すということですが、私共の教会を振り返ってみると、まだまだコロナ禍の時の癖というか、雰囲気の色濃く残っており、おちばへ帰らせていただくという動きがなくなっただけと、まっただけとあります。年祭活動最後の年のこのこともおちばがえりというありがたい機会を一つの勇みにして、子供とともにぜひ帰ってきてもらいたいと念願しております。中には、「うちにはなかなか子供がいらない」という教会もあるかもしれませんが、そうした教会も、育成会員がこの期間おちばに帰らせていただいでひのきしんを勤めることが、「来年には一人でも子供を」という勇みに繋がるのではないかと思えます。そしてそれは、少年会員を守護いただくための伏せ込みとして神様にお受け取りいただけるものと信じております。

おちばには、ご存命の教祖がおいでくださいます。逸話篇には、人々がおちばに帰ってくるのを喜んでくださる教祖のお話がたくさんあります。その一つ一つの場面場面を思い浮かべて想像しますと、年祭活動最後の年の夏、一人でも多くの子供と

おちばに帰らせていただき教祖殿で教祖にご挨拶させていただいたら、きつと教祖は、「よう帰ってきたなあ」と、ニコニコとしてお喜びくださるのではないかと思うのであります。

少年会本部一同、ぜひとも昨年以上に子供と喜びを味わえるおちばがえりにさせていただきたいとの思いで準備、受け入れに努めさせていただきまますので、皆さま方にもどうか一人でも多くの子供とお帰りいただきますよう、お力添えをお願い申し上げます。

これは15、6年前のことだったと思いますが、ある時私どもの教会に、大教会内勤者の役員さんを訪ねて小学校時代の同級生Aさんがやってきました。実はそのAさんは、反社会的組織の絡む債務の事情がもとで精神的に不安定になり、その役員さんのところへ相談に来たということでした。小学校を卒業して以来、その役員さんがAさんとゆっくりと話をしたことは初めてで、あまりの生活の変貌ぶりに驚いたそうですが、やがてAさんの週1回の教会通いは3日に一度になり、そして日参となり、

別席を運びようぼくとなり、様々な事情を経て修養科も修了されました。現在は、いわばまっとうな仕事につき、ようぼくとして成人の歩みを進めてくださっています。

当時自殺も考えていたAさんの足を天理教の教会へと向けたのは、あつ後輩の言葉だったそうです。「先輩、そんなに悪いことが続いているなら、お祓いにでも行って盛り塩でもしたらどうですか」。その言葉にAさんは、「お祓いに行くくらいなら、俺には昔遊びに行ったことのある天理教の教会がある」と思ったそうなんです。

Aさんは小学校の4年生から6年生まで子どもおちばがえりに参加してました。当時の記憶を聞くと、「まったく神様の話は覚えてないし、どんなことがあったかもあまり覚えてない。ただ、カレーが美味しかった。あと教会で〇〇ちゃんと遊んだ。それくらいしか覚えてない」とのことでした。小学生の時、おちばに、そして教会に数回足を運んだだけのAさんは、人生の岐路に立たされたとき、30年の歳月を越えて、天理教の教会を頼って訪ねてきたのであります。

おさしづに、
「もう道というは、小さい時から心写さにゃならん。」

(明治33年11月16日)
とお示しいたきます。

少年会活動は一朝一夕のものではなく、長い目で見て続ける活動です。すぐに御守護が現れるかと言えませんが、そうではないかもしれません。しかし、子供たちが大きくなり、人生の節目を迎えた時に、「私には天理教がある。天理教の教会に行こう」と、そう思ってもらいたいと思うのです。そして、ありがたいご守護を頂戴してもらいたと思うのです。その将来の芽生えに向けて楽しみながら一つ一つ種を蒔くのが、少年会活動であります。

どうか皆様方には、子供たちの人生がこの道にしっかりと繋がりを、明るいものとなりますように、縦の伝道、少年会活動、特に本年のこともおちばがえりの上に尚一層のお力添えとご尽力を賜りますようお願いを申し上げます。話を終えさせていただきます。

ありがとうございました。

(文責・本島通信編集室)

五月月次祭 祭典役割

五月月次祭祭文

立教百八十八年五月二十二日

献饗長 岩橋竜造

伝 供 向所隆文・永島宗行・原口実・後藤正治・奥村龍夫・伊東康成・高垣光治・茶屋原良昭・横山正次・高島栄造・長尾海和・岩橋秀一・白垣初生・香川勝巳・鎌田典夫・宮路和徳・村田輝夫・大矢万三・上山康雄

川村吉夫・溝口晋太郎・横山富明・吉田知彦・文岡邦人・江草克二・肥後信

雅楽奉仕者 池田恒治・伊東賢太郎・鎌田康典・白垣俊生(順不同)

祭主 指方	大教会長	座りづとめ	てをどり前半	てをどり後半			
	岡崎八十則		寺本教生 井上哲		賛者 雲庵春彦 横関茂治		
地方	牧野道昭 岩橋竜造 篠原丕王	向所隆文 永島宗行 奥村龍夫	長尾海和 岩橋秀一 山下英久	大教会長 片山勲 岩橋慶三 会長夫人 前会長 長尾澄子	吉田晴雄 原口実 伊東康成 池田さわみ 岡崎むつゑ 原口和子	横山正次 長濱充憲 大矢万三 高垣洋子 片山美穂 佐藤道子	
ちやんぼん 拍子木	井上哲 岡崎八十則	高垣光治 高島栄造	吉田知彦 江草克二	寺本教生 老木邦光	雲庵春彦 茶屋原良昭	宮路和徳 香川勝巳	
すりがね 太鼓	西山道教 窪田靖明	横山富明 文岡邦人	鎌田典夫 肥後信	雲庵春彦 茶屋原良昭	横山富明 文岡邦人	宮路和徳 香川勝巳	
三味線 胡弓	片山やすゑ 片山孝代	向所暉美子 岩橋元実	梅木澄代 伊東晴美	片山やすゑ 片山孝代	向所暉美子 岩橋元実	梅木澄代 伊東晴美	
神殿講話	島村正規先生	(縦の伝道講習会)				雲庵まち子 横関明美	横関明美

この神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に天理教本島大教会長片山幹大慎んで申し上げます

親神様には陽気ぐらしを見て共に楽しみたいと思召しからこの世人間をお創めになり長の年限十全の守護を以てお守りお育て下さりさらに旬刻限の到来を待つて教祖をやしるにこの世の表にお現れ下されたすけ一条の道をつけて陽気ぐらしへとお導き下さいます御慈愛の程は誠に有難く勿体ない極みでございます

私共はこの大きな親心に包まれて喜びを胸に明るく勇んでたすけ一条の御用に励ませて頂いておりますがその中にも今日の吉き日は当大教会の五月の月次祭をつとめさせて頂く尊い日柄を迎えましたので只今より役目に与るおつとめ奉仕者一同心を澄ませて一手一つに御教え通り座りづとめ・てをどりを陽気に勇んで勤めさせて頂きます

御前には今日を楽しみに国々所々より帰り集いました道の子供達が日頃賜わる厚き御守護への感謝の心で共におうたを唱和して尚もひとすじ心のもとにお継りする真実の状をも御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
なお本日は少年会本部より島村正規副委員長のご出向を賜わり本年の「縦の伝道講習会」を祭典に続いて開催させて頂きます
その上から私共一人ひとりが「育成会員」の立場をお与え頂いているとの認識と自覚をもってお

がばの理を頂戴させて頂く所存でございます

更には今月二十五日に開催させて頂きます「斯道会別席団参」に向つては御存命の教祖にお喜び頂けるよう「心躍る陽気なおちがえり」のもとに一人でも多くの別席者と帰参者の御守護に最後の一日まで心を尽くさせて頂く所存でございます

又来る五月三十一日・六月一日に開催されます「第四回よふばく一斉活動日」にはそれぞれの地域に所属するよふばく信者と共に年祭活動における成人の歩みに励ませて頂きたいと存じます何卒親神様にはこの上共に一層のお導きを賜わり互いに睦みあいたすけ合う陽気ぐらし世界へと一日も早く立て替わりますよう一同と共に慎んでお願い申し上げます
(原文のまま)

入社祭

立教188年5月22日の入社祭はありました。せんでした。

5月22日(木)
【香川県丸亀市】

天候 曇一時雨時々晴

最低気温 19.1℃
最高気温 27.1℃
平均気圧 1003.6 hPa
平均湿度 83%
平均風速 2.5 m/s
日照時間 4.3 時間
降水量 10.0 mm
※降水量は一日の総雨量

斯道会別席団参 本島より帰参者853名

ス道会(河原町大教会の前身)の流れをくむ直属37教会が申し合わせ実施される「斯道会別席団参」が10年ぶり5月25日におこなわれ、本島大教会から853名が帰参しました。

前日から五月雨の恵みをいたたく中、初席に29名、中席に51名(詰所扱い分)が別席を運び、おさづけの理を1名が拝戴することができました。

本島として25日午前10時より第二食堂をお借りし、記念講演をおこない459名が来場。講師の渡辺道治氏(龍陽分教会ようほく)による軽妙な講



講師：渡辺道治氏

話に会場が沸きました。

続いて東礼拝場に移動して午前11時30分「定時のお願いづとめ」に参拝。東西南北の礼拝場は帰参者でぎっしり埋めつくされ、年祭の心定めのためとご守護を祈念しました。

なお本島詰所では24日午後7時より前夜祭を開催し265名が来場。和太鼓ほんじま演奏を皮切りに、ダンスやコント、楽器演奏がおこなわれ、最後に「航海」と「親神様の守護」を



全員で合唱しました。ス道会別席団参は次回11月30日に実施されます。

本樺分教会創立100周年記念祭

本樺分教会(大上道徳会長、北海道札幌市西区)は5月11日午前10時より大教会長を迎え、創立100周年記念祭を執り行いました。参拝者53名。

本樺分教会の元一日は大正14年11月5日、大上代吉を初代担任とし、樺太大泊郡大泊町に本樺宣教所として設立したことに始まり

ます。今年には100周年を迎える節目の年となり、昨年10月26日のお運びにて臨時祭典願の理のお許しを戴いて



記念祭では座りづとめ・てをどりが陽気に勇んで勤められ、続いて挨拶に立つた大教会長は、「100年前の本樺の先人は、世界たすけを胸に危険をかえりみず海を渡りました。そこにはご存命の教祖がきつと先回りしてお働きくださると信じ切る姿勢があったと思います。」と先人の信仰姿勢を振り返った上で、「百という字には『白紙に還って一より始まる』という意味が込められています。初代の挑戦と開拓者魂を心に、本樺分教会の第二章を改めて歩み出してください」と述べられました。

さらに前真柱様が仰せられた教会の使命①教祖の教えを一人でも多くの人人に伝えて、おたすけする場②おつとめを教えられた通りに勤め、世界の治まりやご守護を願う場③土地所における陽気ぐらしの手本となる場を挙げられ、記念祭を意義あらしめるよう新たな一歩を願われました。

訃報

大教会准役員
本室分教会前長

西山貞子 姉



西山貞子姉(本島大教会准役員・本室分教会3代会長)は去る4月29日午前9時55分お出直しになりました。

西山貞子姉略歴
大正11年7月27日生まれ。昭和23年7月18日、おさづけの理拝戴。同年7月27日、修養科第85期修了。昭和43年10月16日、教会長資格検定合格。同年11月17日、教人登録。昭和50年8月26日、本室分教会3代会長拝命。同年12月22日、大教会神殿奉仕人。昭和62年1月22日、大教会准役員登用。平成4年9月26日、本室分教会神殿建築願お運び。立教157年(平成6年)婦人会本島支部委員。同年6月26日、本室分教会長辞職。立教160年(平成9年)1月22日、婦人会本島支部相談役。教会長在職期間18年10ヶ月間。大教会神殿講話を3度勤められました。

事情はじび

(立教188年5月26日付)

本港台分教会

任命願

新任教会長

根岸 巖

改称願

本浜陽分教会

臨時祭典願

就任奉告祭

立教188年6月29日

以上

おさづけの理拝戴

(立教188年4月分)

雄福峰

西形実恵

【計1名】

教人資格講習会修了

(立教188年4月10日付)

肥後八峰

福田貴日

【計1名】

教人登録

(立教188年5月8日付)

肥後八峰

福田貴日

【計1名】

をびや許し

(立教188年4月分)

本備前

伊東むつき

大雄峰

平形佳世子

文峰

肥後節子

新信峰

藤澤穂希叶

鶴峰

天野恵美

【計5名】

証拠守り下附

(立教188年4月分)

本肥港I

【計1名】

能登被災地ひのきしん

青年会本島分会(伊東賢太郎委員長)では、5月2日から4日までの日程で、第3回能登半島地震被災地ひのきしんに出動。初参加者3名を含む12名が参加しました。現地の珠洲ひのきしんセンター



大教会人事

(立教188年5月22日付)

本島学生会

委員長

片山昇太

副委員長

長尾直太郎

委員

高垣さとえ

同

中筋悠真

以上

青年会マンスリー隊

おもに週末、大教会でひのきしんをおこなっている「青年会マンスリー隊」は5月18日に第8回目を実施、12名が参加しました(青年会員8名、OB2名、女子青年2名)。

祭典準備の餅つき、調餽、墓地掃除、客殿掃除をおこないました。次回は6月21日(土)に実施予定。

片山香葉子さん結納

片山香葉子さん(片山幹太・かおり大教会会長夫妻の長女、大教会女子青年・27歳)と松村天晴氏(本部員松村義司先生のご子息、高安大教会後継予定者・31歳)の結納が5月16日に執り行われました。



午前10時すぎ媒酌人の中山正直先生が本島詰所へ結納品をお届けくださり、受書のやりとりがおこなわれました。なお結婚式は立教189年3月16日、本部教祖殿で執り行われる予定です。



ツツジの剪定完了

大教会表参道の斜面に咲く数百本のツツジの剪定が、栄峰分教会を中心とした9名のひのきしん者によって5月10日から5日間かけておこなわれました。

ツツジは花が咲き終わってすぐ来年の花芽をつけるので、5月の剪定が望ましいとされます。今年は斯道会別席団参やようばく一斉活動日がある関係で、例年より早く刈りました。来年の開花が楽しみです。



教会長ご招宴

【教会本部】

「教祖 140 年祭教会長ご招宴(仮称)」

●期日：立教189年1月28日～2月1日

別席 文字通訳

【教会本部】

別席ではこれまで聴覚に障害のある方を対象に、手話通訳をおこなっておりますが、新たに**文字通訳**をおこないます。ご希望の方は1週間前までに、布教部社会福祉課へお申込みください。

青年会マンスリー隊

【青年会本島分会】

おもに祭典準備ひのきしんを行います

●実施日：立教188年(2025年) 6月21日(土)、7月20日(日)

おおoura

大裏地区田植えひのきしん

【伏せ込みひのきしん係】

三年千日おぢば伏せ込みひのきしん

- 内容：大裏地区田植えひのきしん
- 日時：6月24日(火) 午前9時～ひのきしん終了まで
- 送迎：8時50分詰所玄関前より出発
- 場所：大裏地区(天理市豊田町)
- 服装：Tシャツ、短パン(海水パンツ)、サンダル、帽子 ※濡れても汚れてもよい服装
- 作業内容：田植えなど
- 参加対象：教会長夫婦および希望者
- 補足：ひのきしんは内容によって午前中のみになる場合もあります。食事(当日の昼食含む)、宿泊の予約は各自詰所へお申込みください。
- 担当者：岡崎八十則・永島宗行
- 今回、申込用紙の配布はありません。大教会ならびに詰所事務所の記入用紙にご記入いただくか、担当者までご連絡ください。

おやさと講演会

【教会本部】

- 日時：6月25日(水)午後6時～7時
- 会場：第二食堂
- 講師：本部員深谷善太郎先生

こどもおぢばがえり

【教会本部】

こどもおぢばがえり要項

- 期間：2025年7月27日～8月3日
- 要項：インターネットで検索「こどもおぢばがえり」で検索できます
- 申込キーについて：5/22各教会に「申込キー通知書」を配布しています。カレー食の申込と帰参予定人数はインターネットでの事前申込となります。申込責任者登録時に申込キーを入力してください。

鼓笛隊夏季合宿

【本島団鼓笛隊】

第114回本島団鼓笛隊夏季合宿

- 期間：7月26日(金)～7月31日(水)
- 会場：本島詰所
- 対象：小学1年生～高校3年生までの男女
- 内容：7/26おつとめ総会、7/29前夜祭、7/30鼓笛オンパレード&鼓笛お供演奏、こどもおぢばがえり諸行事参加
- 参加費：6,500円(宿泊費・食費含む)、送迎費2,000円(片道・往復問わず一律)
- 服装：練習着(Tシャツ・短パン・帽子・ポシェット)を貸与。洗濯は26日～29日まで実施
- 携行品：白靴、健康保険証のコピー、下着、靴下、パジャマ、タオル、洗面道具、入浴道具、室内運動靴、常備薬、マスク
- 小学1～3年生：男女ともドリーム隊ユニフォームの下に着る白タンクトップと白パンツ各2枚(ボクサータイプ不可)
- 小学4年生以上：半袖Tシャツ2枚(本番用)、楽譜、ファイブ(持っていない場合は1,000円にて用意します)
- 申込締切：7月10日まで各分隊担当までご連絡ください
- 相談窓口：佐藤道子 090-7570-4807

少年会本島団おつとめ総会

【少年会本島団】

立教188年天理教少年会本島団 第35回おつとめ総会

- 期日：7月26日午後1時～7時30分
- 会場：本島詰所
- 対象：少年会員
- 内容：13:00集合受付、13:20開会式、おつとめ練習、おつとめ着付け、16:00おつとめ総会、夕食、お楽しみ行事、19:30閉会式、解散
- 携行品：足袋またはタビックス、着物の下に着る肌着
- お問い合わせ：大上道徳 090-9430-2461

MOMOの会

【婦人会本島支部】

婦人会みちのだい育み塾

MOMOの会「女鳴物勉強会」

- 期日：7月30日(水) 13:00～16:30 7月31日(木) 8:30～11:00
- 会場：本島詰所北棟1階和室
- 内容：女鳴物勉強会(琴、三味線、胡弓をお選びいただきます。初めての方も安心してご参加ください)
- 託児申込：7月10日まで
- 持ち物：琴爪(貸出しもあります)
- 申込方法：MOMOの会担当者に直接ご連絡いただくか、QRコードを読み取り公式LINEの申込フォームからお申込みください
- MOMOの会担当者：永島すすみ(渋谷)、平井由紀子(樺太)、片山美穂(本攝)

6月ひのきしん派遣依頼

【総務部】

〈大教会・食堂ひのきしん〉

- 期間：6月21日～22日
- 派遣：赤峰

〈詰所・食堂ひのきしん〉

- 期間：6月25日～26日
- 派遣教会：本海、本九

6月月次祭ライブ中継なし

【本島通信編集室】

6月22日の大教会月次祭ライブ中継は、ありません。7月22日のライブ中継はおこないます。